

## 第三百三十七回 青葉会

平成二十六年四月二十四日（木）午後六時九時

丸紅来客食堂（談話室）

☆ 川合万里子 先生

伊賀山そらお 今井紀久男 大林猛 小川恭延

柿崎忠彦 久米五郎太 後藤保明 中野一灯

（選者）

（出席者）

（投句）

（紙上選句）

赤田堅 川口孤舟 庄司龍平 高橋敏郎 豊田ゆたか 早川允章 福島正明 星田啓子  
渡邊盛雄 小西弘子 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 福島正明 古田昇 宮内規雄 山内天牛  
村田くに子 山崎青史 山本三恵

（選者吟）

兼題『八重桜』『遍路』『草餅』含む当季雜詠五句。投句二句

万里子

（そ・紀・龍）

忠彦

（紀・五・灯・允・啓・三）

昇

（万・孤・灯・正・青・三）

全

（忠・ゆ）

全

（恭・保）

全

（五）

花菴や三味の師匠の住まひ跡  
母校から色んな球音夕長し  
早世の父の郷（くに）から遍路始め  
手作りの草餅美味し祖母ゆづり  
内濠にジヨガー乗り降り花筏

ジヨガーらの次々と着く八重桜

（互選句）

六点

五点

☆ 駐在の迷子宥むるしやぼん玉  
(正→中七「迷子を宥む」では?)

☆ 花は葉に舞ひ手のをらぬ道成寺

（福助の休演長びき、歌右衛門襲名の舞踊「娘道成寺」は当分出番なし）

忠彦

（万・そ・猛・ゆ・灯）

一灯

（孤・敏・ゆ・允・く）

全

（堅・そ・猛・允・啓）

そらお

（万・堅・忠・く）

全

（猛・保・敏・灯）

☆ 琴の音の洩るる裏木戸八重桜

☆ 線香の煙の中を花の散る

（伊勢神宮）

人はみな元はアフリカ春の闇

（青：そのアフリカがいつまでも闇）

☆ 目借時（めかりどき）作句進まず杯重ね

☆ 星となり絵文字ともなる花筏

☆ 野仏に鳴るアルプスの雪解水（安曇野）

白衣（ひよくえ）着け心定まる遍路かな

春風駘蕩ねむりしままの左脳かな

☆ 山里の古寺をかぎりて八重桜

（☆↓中七「古寺の華やぎ」）

☆ 山笑ふ戻れぬ村の里山も

舟山も姿おぼろに京穀雨

春宵やタラツブ軽く大統領

☆ 老が老押す晩鐘の遍路寺

柔らかな雨に滲むや春灯

☆ 花冷や再入院とEメール

長旅に耐へしいのちや初つばめ

☆ 入学式子らの視線は母を追ひ

（☆↓上五「入園式」の方が句に合っている）

二点

三点

全

（そらお）

一灯

（万・そ・允）

忠彦

（万・恭・龍）

弘子

（五・正・く）

惠洲

（龍・敏・允）

保明

（五・敏・亜）

堂哉

（万・そ・允）

忠彦

（万・恭・龍）

渡邊

（堅・恭・保）

盛雄

（堅・恭・保）

そらお

（万・猛）

花散れど姿正しき法隆寺

行く春や八十路の峠越え行かん

殿（しんがり）の務め果せり八重桜

☆

國の為散る世再び花吹雪

沖を向く裸婦像ふつくら花だいこん

（下五「花だいこ」にしたら？）

闘ふとも見えて春鬪果てにけり

八重桜人の命の重くして

善良な嘘と知るべし四月馬鹿

草餅買ひ若き女将と長話し

酒うまし今宵青饅（あをぬた）妻褒めて

念すれば花ひらくてふ春の寺

見上げても花また花で空見えず

ゴンドラや桜も人もわしづかみ

八重桜重たげな胸揺らぎをり

石楠花の大輪一つ伽羅添えし

草餅の香り薄れし喜寿間近

花筏オブジエのように形変え

残桜や疎林の草色映え立たせ

水底の若き御魂ら花散りぬ

四人組スコア拵（さこ）置き花談義

山鳩の声を聞きつつ朝寝かな

燕の巣軒貸す主（ぬし）はブランジエリ

大きさに善き心出づ蓬餅

鍾馗面（しょうきづら）の男もマスク花粉症

一点

そらお（正・三）

恭延（そ・亞）

全（堅・保）

忠彦（万・青）

弘子（忠・青）

天牛（龍・正）

昇（紀・三）

恵洲（龍・正）

正明（啓・亞）

猛（龍）

五郎太（龍）

紀久男（龍）

健介（龍）

保明（龍）

全（亞）

平成二十六年四月句会報

● 次回青葉会

五月二十二日（木）午後六時（丸紅 談話室）

▲兼題「花菖蒲」「鰹」一句以上含む当季雜詠五句

六月九日（月）川越吟行・参加希望者は御連絡下さい

以上 文責 紀久男

一 今回は先生以下10名出席。投句9名。常連の天牛さん、ゆたかさん、正明さん、弘子さんが欠席で一直到り淋しい句会でしたが、いつもの寄贈・先生のちび鯛焼（茂蔵）・煎餅「はりま焼」（豊岡）・「武藏本陣焼」、保明さんの「剣菱」、小生の「越乃寒梅」、そして忠彦さんの「人気一」純米吟醸（二本松）と甘辛の逸品を賞味しつつ結構盛り上がりました。韓国の旅客船「セウォル号」沈没事故等を話題にし乍ら、ヴェテランの猛さんの披講で、御覧のように忠彦さん、昇さん、一灯さん、そらおさんが高得点でした。

二 関係者近詠

敗戦の年の豪雪空襲下

投稿の中に絶筆一月尽

まちまちに出掛ける朝の大根汁

嬰のものを日々手洗ひや石蕗の花

万里子

眞希子

病室の窓辺より春きざしをり  
身の幸や今年も花の真つ盛り  
用水を埋め尽して花筏

規雄

万里子

鈴木章和選

一

「NHK俳句」五月号

風花に葉書庇ひつ投函す

白襟をいまに母校や冬木の芽

笑ひ声わつと膨るる白障子

ざんばらの力士遠くへ豆を撒く

校庭に白梅静か投票日

咲きさうな鉢を窓辺に寒の明

——「萬緑」五月号——

触れるものすべてにいのち鳥の恋

句作には舞台は要らぬ春疾風

はこべらや友の蕎麦打見守りて

——「きさらぎ句会」3月25日

長閑さや常世の波の寄する伊勢

和服着て草鞋履きたや伊勢參り

被災地の陽炎をちこち御靈なり

——「きさらぎ句会」4月22日

ゆさゆさと大枝搖るる八重桜

存分に人を酔はせて花は葉に

杖借りて殿に蹤く花の山

降りくるや吉野の花は雲井より

花筏嵐と見まごう夜を過ぎて

サクラサク合格発表今むかし

二円貼り友への便り春らんまん

車椅子の老々介護花吹雪

——「待つてました！」どよめきやまぬ春の舞

——「待つてました！」膀胱癌克服して舞台復帰の三津五郎

——「待つてました！」待つてました春の舞

平成二十六年五月九日

——「多摩句会」山梨吟行（4月12日）

——「摘蓄のラジオぐもる桃畠

トンネルへ春の貞を捲る旅

飛び切りの鶯声ひとつ吟行へ

一望の川原を埋む桃の花

鳥囀す落花に埋もる手水鉢

多重塔ひつそり佇ちて著莪の花

蒲公英や誰にも故郷ありにけり

春燈の胸にも点る集ひにて

清酒一本まことに据え花の宴

春日遅々鯉は悠然亀泰然

月に身を晒し番の浮寝鳥

凍鶴の孤高を持して相寄らず

山河引き締め滑翔の蒼鷹

冬椿落ちて水輪を重ねけり

空一枚大きく使ひ雁来る

鶏鳴に和し暁暁と雁のこゑ

雁の野に祀る木花開耶姫命

みちのくの千賀の鹽竈月祀る

月白し白鞘巻の白拍子

——「爽樹」五月号

——「天為」四月号

弘子  
全

紀久男記

三

東京やなぎ句会編「友ありてこそ

五・七・五」岩波書店

2013 / 12 / 17

¥800

恵洲さん御推薦で図書館から借りて読み、小生好みを抄出してみました。

A 重い脳梗塞で入院中の光石（扇橋）の句について、同句会に招かれた宗匠6人がその魅力を語つております。

・香に触れて過ぎし無月の女かな

：大牧広、黒田杏子の選

・掌にのせてひやりつめたき蚕かな

：鷹羽狩行選

・遙かよりバス踊り来る草いきれ

：中原道夫選

・春雨の霖をきいてひとりかな

：全

B 句会仲間が光石約2000句の中から130句選

・春ひさぐかなしさは朱の長煙管

：

・春さむき鏡の中のよそよそし

：

・酔へばすぐ声色が出て志ん生忌

：全

C 一昨年亡くなつた変哲（小沢昭二）への追悼句

：

・もう一度上がつたもれ冬の寄席

：

D 最近の句会より（2013/7/17）

六丁目（永六輔）

杏子